

# 利用の手引き（の前に）

本サイトは、現在「ワークショップ」と呼ばれる表現を収集・公開し、それを実行するにあたっての仲介・サポートを行うために構築されています。別の言い方をすれば、「最近なんかいい展示あった？」という会話が、「最近なんかいいワークショップあった？」でもいいはずだという思いで、走り出しています。

なぜ「ワークショップ」なのか。それを説明するために、まず、アートとの接点について考えてみます。現在、私たちがアートなるものと接する上では、何よりも「展覧会」が中心的な役割を果たしています。これはここ数十年の話ではあると思うのですが、少なくとも現在、特にこの傾向は強くなっているように思います。ある表現を、歴史化する、美術史に位置づける、現代社会との相関関係を強調する、売買可能なものに変換して経済圏に放流する、ケアの一手段とする ... こうした実践を実行するにあたっては、展覧会がフル回転しています。アートシステムには、「展覧会中心主義」がある、と言ってよいでしょう。

であれば、「展覧会」ではなく、「ワークショップ」を中心にアートシステムを考えてみたら、あなたの頭のなかに思い浮かぶ表現、作品、芸術家の名前は変わってくるのではないのでしょうか。「アート」の定義が少し変わるのではないのでしょうか。唐突に、小学校のとき受けた図工の授業や、夏休みに親に連れて行かれたイベントや、児童館の土曜日の催しや YouTube の動画が頭をよぎったりしないのでしょうか。ピカソよりも、名前も思い出せない謎のお兄さん、おっちゃん、お姉さん、おばちゃんを先に思い出すのではないのでしょうか。

「美術館での個展」や「作品の売買」のように、「ワークショップの実施」がごく当たり前、「生計」や「表現」や「交流」の手段だとしたら、ずいぶん変わってくるような気がしています。展覧会よりもワークショップの方がすごいと言いたいわけではありません。ただ、少なくとも人たちが「ワークショップ」といまとりあえず呼ぶしかないジャンルの表現において、ドキドキした、ちょっと面白かった、自分の居場所があった、何年かして不意に思い出した、自分の子どもとやってみた——といった経験をしたのではないかという仮説を強く打ち出したいのです。このプロジェクトでは、「ワークショップ」と呼ばれるような表現行為について掘り下げ、すでにあるこの世界において、別の可能性がたくさんあることを考えていきたいと思います。